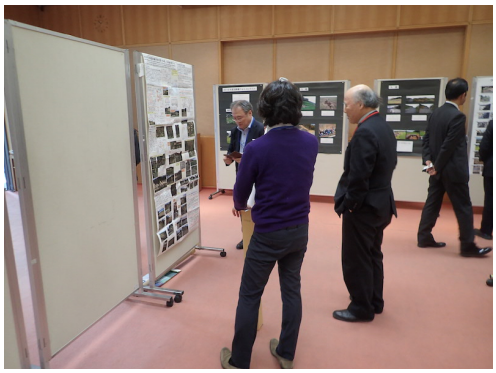
日本活断層学会 2018 年度秋季学術大会開催報告

日本活断層学会 2018 年度秋季学術大会実行委員会

2018 年 11 月 23 日(金)・24 日(土)・25 日(日)，鳥取市のとりぎん文化会館において，日本活断層学会 2018 年度秋季学術大会が開催された。参加者は，会員 70 名（うち学生会員 10 名)，非会員 17 名の，計 87 名であった。一般研究発表は，口頭発表が 9 件，ポスター発表が 24 件行われ，シンポジウム「潜在断層地震の予測への活断層研究からのアプローチ」，2018 年度フォトコンテストの作品展示，また表彰式，懇親会，最終日には巡検も行われた。

23 日(金)は午後からの開催で，とりぎん文化会館第 1 会議室にて一般研究発表(口頭)が開催され，3 件の発表と質疑応答が行われた。今年度の新たな試みとして，ポスター発表のショートプレゼンテーションが実施され，9 件についてポスターの内容が簡単に紹介された。それに続いて一般研究発表(ポスター)が第 2 会議室で開催され，24 件の発表があった。アナグリフや写真をふんだんに使った発表が多く，口頭よりもポスター発表が多くなる要因になっていると思われる。その分，活発で熱心な議論が各所で展開された。今後の発表形式について検討が必要と考えられる。2018 年度フォト コンテストの作品展示も，23 日(金)の開場から 24 日(土)の午前中，ポスター発表と同じ第 2 会議室にて行われた。



左:一般研究発表(口頭)，右:一般研究発表(ポスター)の様子

23 日(金)の夕方には，鳥取賀露港の海陽亭にて懇親会が開催され，55 名が参加した。香川敬生実行委員長，佐竹健治会長の挨拶に続いて熊木洋太前会長による乾杯の発声を受け，松葉カニ，鳥取和牛など地場料理と地酒を堪能した。しばし歓談の後，学会賞を受賞した千田昇先生にお言葉を頂いた。最後に 2019 年大会実行委員会から佐竹健治会長の挨拶，近藤久雄行事委員長の締めで散会となった。

懇親会の様子

24 日(土)の午前には第 1 会議室にて一般研究発表(口頭)が開催され，6 件の発表と質疑応答が行われた。普及教育委員会からは，『第一回「活断層の学校」in つくば』の報告を兼ねた発表が行われた。

24 日(土)の午後から，第 1 会議室において，学会賞，論文賞，若手優秀講演賞および 2018 年度フォト

コンテストの表彰式が開かれ，それぞれに佐竹健治会長から賞状が授与された。 学会賞には，九州における活断層に関わる重要な研究成果や「九州の活構造」をはじめとする出版物の刊行を通じて九州の活断層や地震テクトニクスの理解を進めることに大きく貢献された千田昇大分大学名誉教授，活断層近傍における防災施策として活断層によるずれによる被害に注目して断層沿いに調査区域を設定する条例を制定した徳島県，地震の揺れの被害に注目して築物の安全性を高める条例を制定した福岡市が受賞した。論文賞として，活断層研究 45 号に掲載された「高分解能地層探査およびコアリング調査に基づく沿岸海域における活断層の活動履歴の解明−八代海における日奈久断層帯を例として−」（著者 八木雅俊・坂本泉・田中博通・横山由香・井上智仁・光成 魁・アイダンオメル・藤巻三樹雄・根元謙次 の各氏）が，沿岸域活断層調査の典型例として今後長く参照される論文として受賞した。若手優秀講演賞は，以下の 3 件の発表に対して授与された。「阿蘇カルデラ西部濁川左岸沿いに出現した地表地震断層とその活動履歴」（白濱吉起氏），「大磯丘陵東部における吉沢層構成礫の特徴と活構造の推定」（村木昌弘氏），「日本海溝と南海トラフの海底変動地形と反射断面の比較および海底地すべりの空間分布特性の考察」（森木ひかる氏）。今年度は若手優秀講演賞の該当者が学生を含めて 13 名と多く，この傾向が続くことが望まれる。2018 年度フォトコンテスト入賞作品の内訳は、優秀賞 2 作品，入選 7 作品，特別賞 1 作品である。特別賞は，大会中の投票により選出された。

左：学会賞受賞の代表者，中:若手優秀講演賞受賞者，右:フォトコンテスト入賞者

引き続き，シンポジウム「潜在断層地震の予測への活断層研究からのアプローチ」を一般公開で実施し，市民を含め 100 名を超える参加を得た。開催地である鳥取県を含む中国地域北部には明瞭な活断層は少ないものの，活断層よりも地震活動により地震発生確率が高く評価され，実際に 2016 年 10 月に鳥取県中部，2018 年 4 月に島根県西部で被害地震が発生している。2018 年 6 月に発生した大阪府北部および 9 月 6 日発生の北海道胆振東部地震も潜在断層の活動と考えられる。このため M6 級の地震はどこでも発生し得るとする向きがあるが，活断層研究の手法および異分野と連携したアプローチから，活断層の明瞭ではない地域 の地震想定について議論する機会とした。題目と講演者は以下の 5 件である（いずれも招待講演，敬称略）。「測地データに基づく山陰ひずみ集中帯の地震活動と活断層」（西村卓也），「短い活断層と潜在断層をどう評価するか −断層成熟度と応力の蓄積・解放・伝播−」（遠田晋次），「地表に露出する断層と山陰地震帯との関係」（向吉秀樹），「地表断層地震と潜在断層地震の地震動」（香川敬生），「潜在断層地震の予測への活断層研究からのアプローチ」（近藤久雄）。最後の総合討論では，隈元崇実行委員の進行で有意義な意見交換をおこない，今後の活断層研究の方向性のひとつを模索することができた。

シンポジウムの様子

25 日(日)には，山崎断層帯を対象に巡検を行った。参加者は 26 名と盛況であった。巡検案内者は加藤茂弘氏(兵庫県立人と自然の博物館)である。午前中は 868 年播磨の国地震で動いたとされる大原断層を追跡し，大原宿で昼食休憩を取った。午後には宍粟防災センターで断層露頭断面を見学し，土万断層，安富断層，暮坂峠断層を追跡した後，姫路にて解散した。

左:巡検の様子，右:参加者記念写真(宍粟防災センター)

最後に，本大会に助成を頂いた(公財)とっとりコンベンションビューロー，(一社)鳥取市観光コンベンション協会，会場を提供頂いた(公財)鳥取県文化振興財団，巡検で見学させて頂いた宍粟防災センター，準備・運営にご尽力い頂いた学会事務局，アルバイトを引き受けて頂いた鳥取大学大学の学生をはじめ，関係する方々および機関に深く御礼申し上げます。